

金木の
かたがりべ

第16集



発行 わがふるさとを探る会

金木の荒馬

津軽地方農村地帯全般の行事であった「さなぶり行事」の役をになっていたのが荒馬踊であった。

金木の『さなぶり荒馬』は、かなの古い形態のもので、北五地方でも独種なもので、次のように伝えられてきた。

天保の頃、藩主信政公が少数の士卒を連れ、民情視察の金次金木村を訪れ八幡宮に五穀豊穰を祈願された。突然のことなので神を笹木代、並に庄屋角田代あいはからい、村人あげてこれを迎え、帰りには礼をつくして村端れまで見送った。

当時赤坂（若松町の入口）手前の橋は丸太橋で、いたって粗雑なものであったが、藩主信政公馬の手綱をとり、供奴二人が左右に手綱をのばして、一回二回と後に下り、右に引き、左に回り、三回目には英姿さっそうとして橋を渡り切ったとすることで、藩主の貝事な英姿に感激した村人は、村の誉れとして「虫送りの荒馬踊り」に組み入れたと伝えられて来た。

本来荒馬踊りは農耕の所作を表現したものが、金木の荒馬踊りは、藩主橋渡り英姿を踊りの中に組み込んだ、金木独特の荒馬踊りに継承されて来た。（本文金木郷土史より抜擢）

金木の かたがりべ

言 頭 卷 て せ 寄 に 刊 発

異 下 木 教育長 委員会 教育 金木町



ふるさとの『かたりべ』第十六集が発行されましたことについて衷心より喜び申し上げます。

会が発足したきっかけは、嘉瀬小学校百周年記念誌『嘉瀬小百年史』を発行した後、その編集委員有志が集い、これを機縁に「嘉瀬ふるさとをさぐる会」をつくろうではないかと準備会が設立、昭和五十二年四月二十八日、有志十四名が参加して組織会が開催され、初代会長に山中正津氏を選任、不肖私が事務局担当を指名され三年間務めたものです。

会が発足した一年間は、「人丸神石移転折衝と遷座式典挙行」について走り回ったことが懐かしく思い出されます。

そして、毎月の定例会による「ふるさと嘉瀬歴史の基礎的研究」ファイルドワークによる「遺跡神社仏閣めぐりの合宿研究」等、実直な山中正津会長と熱心な会員の力で微力ながらも、会を郷土史研究



団体として軌道にのせることに専念したものです。四年目、小泊小学校へ単身赴任のため、木下清一氏に事務局長を引き継ぎました。

その後、山中正津前会長、木村治利現会長、木下清一事務局長らが中心になって、会の課題であった研究記録集ふるさとの『かたりべ』を発刊し、第十六集まで精力的に継続してきています。このふるさとの『かたりべ』は郷土史研究の貴重な文献として、町民は勿論のこと県内外の郷土史研究家に高く評価されてきています。また、鎌田慧氏の『津軽・斜陽の家』の著書に数多く引用掲載されています。

このように「太宰のふるさと」金木町の文化活動の一翼を担い、郷土に大きく貢献していますことに深甚の謝意を表し、会員の益々のご研鑽と、会のご発展を心からお祈り申し上げ発刊に寄せる辞といたします。

かたりべのふるさと



写真グラビア
津軽の寒立馬

平成十四年二月初頭の厳寒の朝、日課の朝の散歩に嘉瀬地内保食宮の前を通ると、石像の馬ッコが雪をかぶって寒さに耐えているかのように、無言の行で立っている。

台座の雪を払って寄進者名をたどると、

すでに死界に入った人の名が多く刻まれ、農耕馬を飼育していた人、小運搬業の駄賃付をした人の人名が確認できた。

金木町の神社境内に安置しある石像神馬を一周してみると、昭和六十一年奉納が最後となっている。

金木町の水田が圃場整備事業に伴って、農道が張りめぐらされ、軽トラックが従横に疾駆する機械化で、昭和六十年以降、農耕馬は完全に田の面から、その勇姿を見ることがなく、競馬競争用、肉用販売に飼育される馬が金木に見られるだけだ。

馬の背にまたがり家路を急ぐ若者の歌う山唄の流れる、田の面の情景は完全に金木町から消えた。

神社に安置された神馬石像、寒立馬は今日も雪

にさらされ立ち続ける。(きのした清一)

◎嘉瀬八幡宮 昭和二十九年一月一日

奉納 発起人平川久四郎外七十名

◎嘉瀬保食宮 昭和六十一年六月三日

奉納 発起人松川孫蔵外六十九名

嘉瀬八幡宮の馬ッコ



嘉瀬保食宮の馬ッコ



喜良市川上神社の馬ッコ

◎喜良市 昭和三十七年旧六月十七日
奉納 総代近藤作之助外代子一同



金木八幡宮の馬ッコ

◎金木 昭和六年一月
奉納 伊藤豊吉外七十九名



金木保食宮の馬ッコ

◎金木 昭和二十三年八月二十一日
奉納 角田久七外

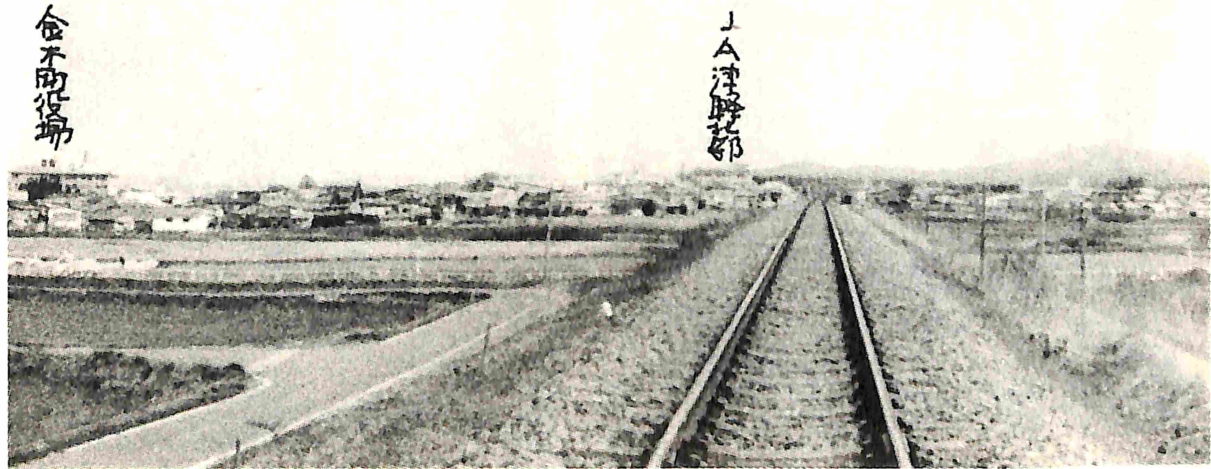
◎昭和十五年五月十三日
奉納 工藤源三郎名



藤枝保食宮の馬ッコ

目次

《巻頭言》 発刊に寄せて	木下 巽 1
『王道楽土』の名のもとに	逢坂伸三 6
史跡めぐり研修旅行 県境・矢立峠探索	木村治利 10
〔文芸〕 詩・俳句・短歌・川柳	17
俺ア村コの絆 小田川の流れ	山中長三郎 28
金木の集落をさぐる	秋元惣之進 41
嘉瀬観音山をめぐる	山中長三郎 53
津軽地方伝承俚諺解釈	秋元惣之進 67



金木助役場

歴史散策 金木散歩

- ①消える古道 26
- ②金木用水水源は
馬禿下にあった 38
- ③八幡宮扁額 52
- ④今に残る木橋 66

古文書控帳より

- ①墓 石 37
 - ②嘉瀬賽の河原地蔵尊 51
- 写真グラビア
金木の寒立馬 2

- 〔寄稿〕 火の用心・立ち物づくし 折戸谷 勉 65
- 〔寄稿〕 大晦日の出来毎
金持が貧乏になった話 折戸谷 勉 78

- 金木スケッチ新木橋コメント 91
- 会員名簿・赤エンピツ 92

復刻版 津軽鉄道沿線案内

- 80



金木病院

南谷

斜陽館

「王道楽土」の名のもとに

逢坂伸 三

書き出しから大それた字句を使ったが、私が物心ついてから昭和二十年八月十五日正午、天皇陛下の王音放送がなされるまで、何の違和感もなくこの言葉を使っていたし、学校でもそのように教えていた。

因みに、岩波書店発行の広辞苑によると「王道楽土」とは「王道に基づいて治められる安楽な土地」とある。

私が小学校に入学したのは、金木のかたりべ第十四集でも書いた通り、我が国が米・英を相手に宣戦を布告し、大東亜戦争（終戦後は太平洋戦争に変わった）が勃発した年の昭和十六年四月一日だった。

教育の管轄も内地では文部省だが満州では独立した機関だということなのか、教科書は在滿教務部というところで発行されたものだった。そして、その年まで学校は尋常小学校で、一年生が最初に教わる読み方の第一ページは「サイタ サイタ サクラガサイタ」だったのが、我々が入学した時は在滿国民学校

と改称され「サイタサイタ…」が「アカイアカイアサヒアサヒ」と変わったのである。

これは、おそらく当時、我が国は大日本帝国、神武天皇以来の神の国、そして日の出づる国ということで、この戦争に勝たねばならないということと国民の士気昂揚のためだったように思われる。そして、授業といえ、今では到底考えられないことだが、通常の教科のほかに、神武、綏靖、安寧…以下略と延々百二十四代今上（昭和天皇）までの天皇名の暗記をさせられた。最後まで暗誦できた頭のいいやつもいたようだが、大半は暗記出来なかったと思う。私もそのうちの一人だった。

又、その年の十二月八日に始まった宣戦布告の詔書や、教育勅語、そして高学年になると青少年学徒に賜わりたる勅語、あるいは、出征した時に必要だろうということで軍人勅諭なるものまでも暗記させられたが、今では忘れてしまった。戦後でも五十六年にもなるのだから無理もないことだと思ふ。

そして、体操の教科では、相撲、剣道、分列行進は必須科目、そのほか、戦局酣になって来ると防空演習や、防空壕掘りなどもやらされた。又、空襲を受けて火事になった場合に備えてのバケツリレーによる消火訓練や、敵兵が落下傘で降下して来た時の竹槍訓練、毒ガスで襲われた時の対処の仕方など様々な体験をした。

今では考えられないし又、ウソのような話だが、各教科の試験の採点方法も次のようなものだった。

例えば現在、百点満点の場合は百点、九十点、八十点…という表示が普通かと思うが、当時、私達に対する採点方法は百点の場合轟沈、九十点は撃沈、八十点は大破、七十点は中破、六十点は小破という具合に、敵艦を沈没あるいは、損害を与えた程度に応じた方法で表示された。であるから~~●~~というゴム判を押された者は小踊りして喜んでいた。

又、毎日、ラジオのニュースで戦況の報道が流されていたが、それによると、大本営陸海軍部発表、我が陸海軍部隊は、敵艦〇隻撃沈、巡洋艦〇隻撃沈、その他数隻大破、敵機〇〇機撃墜破、これに対して、我が方の損害は軽微なり」という放送が頻繁になされていたが、戦後、戦記に関する著書を読んだところ、開戦当初から昭和十七年半ば頃までは本当だったが、そのあとは全く逆の放送を流していたというのである。

放送局も、今ではNHKのほかに民放が何社もあるが、当時はNHKだけが唯一の放送機関、しかも半国営的なものだから

軍部の統制が厳しく、現在のような言論や、表現の自由などもってのほか、自国の作戦や、被害状況などは極端にねじ曲げられたものになっていた。

当時、兵隊を乗せた列車の窓は全部、カーテンで塞がれていて、乗っている兵隊自身、今どこを走っているのかは勿論、どこへ行くのかも知らされてなかったそうであり、まるで豚や牛扱いだ。

一般家庭でも晩になると、電灯の灯りが洩れば敵機に見つかるからといって灯火管制なるものが厳しく実施され、町内会の班長などが巡回して来た。そして各家庭では電灯を黒い布などで被い、光が外に洩れないようにして、その直下で新聞や、本を読んだりもしたものである。しかし、連合軍側にしてみればそんなことをしても、しなくても何の影響も及ぼさなかった。

というのは、レーダーの発達によって暗夜でも昼夜のごとく攻撃目標を捕らえられたからである。大袈裟な話だが、終戦となり、自由に電灯が灯されたときは真昼のようなまぶしさを感じたものである。

当時、見ざる、聞かざる、言わざる。という言葉が流行った。これは、敵のスパイがどこにでもいて、軍事機密が洩れれば、戦局に重大な影響を及ぼすので見ても、聞いても、何も言うなということである。しかし、それほど言論を封鎖し、弾圧しても、戦局には何の変化も、もたらさなかった。

我が国では当時、敵国の言葉を使うなという変な教育がなさ

れた。英語などは、その顕著な例である。例えば、野球を例にあげると、「ストライク」「ボール」「アウト」などといわず、「よい球」「駄目」：などと言いだえられ、最後には、野球そのものも、敵性スポーツということで禁止、野球場は、主食の農作物を作る畑にされたりした。

しかし、前にも述べたごとく、いかに厳しい統制をしても、実際は何の役にも立たなかった。相手国は、日本語教育を徹底して行ない、日本の習慣、風習までも研究し、日本人よりも日本を熟知、分析し、そして高度なリーダーや、無線装置を駆使して、日本側の暗号、情報を逐次解読の上、作戦に取り入れたので、嚴重な日本の防諜活動は全く、徒労に終わったといっても過言ではなかったかと思う。

事実、日本でひた隠しにしていたと思われる情報が、私が住んでいた満州牡丹江にあった銭湯に入りに行った時のこと、客の一人が、次のようなことを言っていたのを聞いたが、それによると「何でも今、アメリカでは、大変なものを発明したという、マッチ箱ぐらいの小さな物で、何万トンもの戦艦を一年一杯走らせることができるそうだ。」と、今、思うとそれは原子力のことを指していたような気がする。

このようにして戦局が増しに悪化して来ると、銃後（戦地でなく一般の居留区域）でも、戦事色が濃くなって来た。一般人達のうち、女、子供、老人を除く成、壮年者は皆、半強制的に月に何回か、学校の校庭に集合させられ、持参した奉公袋に

自分の髪の毛や、爪、そして以前、兵隊に行った者は、軍隊手帳などの点検、点呼を受けた後、軍人勅諭を読み上げたり、分列行進、そして、敵襲に備えての木銃を構えて、突撃訓練などを行っていた。

私が終戦まで住んでいた牡丹江市には、軍司令部があり、兵隊が沢山いたが、航空隊もあって、市街から数キロ離れた所に飛行場があった。学校行事の遠足の場所としては、もってこいの所ということでもよく行ったものである。そして只、飛行機の離、着陸を見ているだけではということ、滑走路近くの草取りの手伝いなどをした。その我々の頭上では、赤トンボといわれた練習機が、吹き流しをつけて空中戦の練習をしていて、我々は、妻いものだと感心して見上げていたが、戦争末期になると、その飛行機も見られなくなった。恐らく、前線基地の飛行機が無くなり、止む無く練習機までも特攻用に使われたのではないかと想像される。

鉄製品とあらば、寺の鐘までも供出させ軍需物資として使うなど、日本のあらゆる資源は、八〇九割方、外国に依存しなければならなかった（今でも変わらないと思う）のが、近隣諸国、それに米、英という強国を相手に戦いを挑んだこと自体、無謀極まりなかったと思うが、窮鼠、猫を噛むの例えで、万止むを得なかったのではなからうか。

最近、アメリカのニューヨークで起きた、航空機による同時多発テロに対して、アメリカは、アフガニスタンや、タリバン

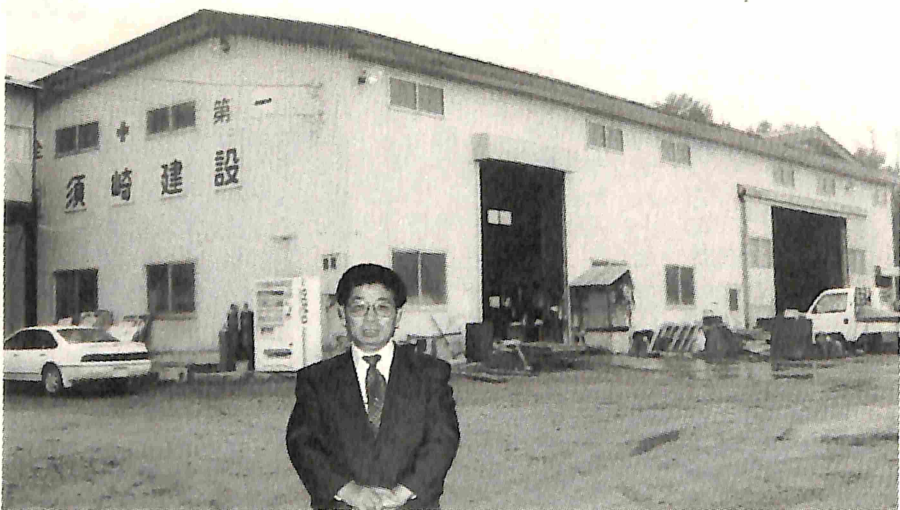
に報復措置として、大規模な空爆を展開していることが、テレビで連日のごとく放映されている。それに対して、相手国は、聖戦と称して、徹底抗戦の構えを見せている。それを見て私は、六十年前のことを思い出さざるを得なかった。

前にも私はそのことについて、若干、触れた記事を書いたが、天皇陛下のためならば命は惜しくない、名誉の戦死をすれば軍神となり、靖国神社に祭られる。それが、真の日本魂だという気迫のもとに兵隊達は戦地に赴いていった。これが、当時の日本人としての気持ちだったし、そのような教育を受けた子供達も、当然、そのような思想を植えつけられていったのである。

それが、昭和二十年八月十五日を境に、我が国は、憲法第九条のもとに永久に軍備を持たない、交戦しないということまで経過し、日本人の誰もがそのような考えで、日々を過ごして来たが、最近、アメリカに追随する形で、何かキナ臭い様相になって来た。

これまで私は、兵隊にこそ行かなかったものの、死ぬ寸前の苦い体験を幾度も味わって来た。まさか我が国が戦争に巻き込まれることはないだろうが、しかし、絶対とは言えない切れないのが、現在、日本が置かれている状況ではなからうか。

そこで、願わくは、我々が味わったあの忌まわしい体験を、自分自身はもとより、次世代にも味わせたくないと思うし、本文の表現とした真の「王道楽土」を目指す我が国が、永久に続いてもらいたいと考えるのは、単なる私の身勝手な思いだろうか。



防護柵一式

有限会社 須崎建設

代表取締役 須崎悠悦

金木町大字嘉瀬字端山崎202番 TEL0173(52)3571 FAX0173(52)2303